

### 383 脳内コリンエステラーゼ活性測定の特レーサーデザインと評価: 脂肪酸エステル構造と脳内分布相関の検討

玉上 浩, 野崎 正 (北里大学衛生学部) 入江 俊章, 福士 清 (放医研臨床研究部)

われわれは、生体内での代謝変換を利用し、脳内アセチルコリンエステラーゼ (AChE) 活性をインビボで測定する特レーサーとして *N*-methyl piperidyl acetate をデザイン標識し、その可能性を評価してきた。今回は、脂肪酸残基の構造変化と脳内特レーサー分布との相関性の検討を試みた。脂肪酸残基として、acetyl, propionyl, isobutyryl および butyryl の4種のピペリジルエステルを標識合成した。これらの特レーサーについて、マウス脳内局所分布の比較を行なった。さらに、インビトロでの脳内エステラーゼによる代謝速度と特異性について比較した。

### 384 PETにおける68 GA-DTPA-アルブミンを用いた局所脳組織ヘマトクリット (rHt) の測定

脇田員男<sup>1</sup>, 今堀良夫<sup>2</sup>, 山下正人<sup>2</sup>, 水川典彦<sup>2</sup>, 小田洋平<sup>2</sup>, 上田聖<sup>2</sup>, 堀井均<sup>1</sup>, 藤井亮<sup>1</sup>, 柳生武彦<sup>1</sup>, 稲葉正<sup>1</sup>, 青木正<sup>1</sup>, 日野明彦<sup>2</sup>, 中橋彌光<sup>1</sup> (西陣病院<sup>1</sup>, 京都府立医科大学<sup>2</sup>)

脳血液ヘマトクリット値と末梢血ヘマトクリット値が異なることは以前からよく知られていることである。最近では虚血などの病的状態において大きな変動を示すことが報告されている。この事実はPETにおいて従来行ってきたO-15ガス吸入法による脳循環、酸素代謝諸量の測定に対して大きな影響を及ぼすことになる。そこで今回我々は、標識率や静注後の体内での安定性の良い68 GA-DTPA-アルブミンを合成しPETを用いてサルの脳組織内ヘマトクリット (rHt) を実測した。また従来で求めた値との相違について検討したので報告する。

### 385 重み付け積分法によるコンパートメント解析: シミュレーションとPET臨床測定による評価

横井孝司, 天野昌治 (島津製作所医用技術部) 飯田秀博, 菅野 巖, 三浦修一 (秋田脳研 放射線科)

重み付け積分法をコンパートメントモデルに適用すれば、コンパートメント間の速度定数の高速画像化が可能である。我々は1コンパートメントモデルの基礎方程式であるKety-Schmidtの式を最初に時間積分して、重み付け積分する方法を開発した。シミュレーションより、我々の方法は、すでに開発されているUCLAの方法に比べて統計ノイズに影響されにくく、使用する重み関数にあまり依存しないことが分かった。さらにO-15標識水静注法に適用した臨床画像より本法の統計ノイズに対する優位性が確かめられた。また本法はFDGのような3コンパートメント4速度定数モデルにも適用が可能であり、それについても検討した。

### 386 PET脳画像の解剖学的位置の標準化

三浦修一, 菅野 巖, 藤田英明, Ian Sam, 飯田秀博, 村上松太郎, 穴戸文男, 上村和夫 (秋田脳研 放射科)

脳の生理学的機能の解明にとってPETは一つの重要な手段である。PET測定では、各被検者の脳の解剖学的位置を標準化し生理学的機能と対応をとる事が不可欠となる。これまで、Fox, Friston, 千田らがこの標準化の方法を発表しているが、我々も比較的簡便でかつ日本人の脳の形状に適した方法を検討した。本法では、脳の三次元的マップの基準となるAC-PC線を冠状断エミッション画像から、脳のX, Y, Z方向の寸法は主に側面X線フィルム像から求めた。これらのパラメータとTalairachの標準マップに基づいて各被検者の三次元画像を回転、平行移動、拡大、縮小し標準化した。本法の精度、有用性および日本人の脳への適合性を評価した。また、トランスミッション画像の活用についても検討した。

### 387 FDG DOUBLE INJECTION による解析モデルの評価

堀井 均<sup>1</sup>, 今堀良夫<sup>2</sup>, 沖 史也<sup>2</sup>, 水川典彦<sup>2</sup>, 山下正人<sup>2</sup>, 小田洋平<sup>2</sup>, 上田 聖<sup>2</sup>, 脇田員男<sup>1</sup>, 藤井 亮<sup>1</sup>, 柳生武彦<sup>1</sup>, 馬淵非砂夫<sup>1</sup>, 稲葉 正<sup>1</sup>, 中橋彌光<sup>1</sup> (西陣病院<sup>1</sup>, 京都府立医科大学<sup>2</sup>)

第29回核医学総会において、我々はSokoloffモデルを基に、FDG double injectionによる解析モデルについて検討したが、正確性・再現性に問題があった。今回はK4 (dephosphorylation) 因子を考慮したPhelpsらのモデルに従い、test-retestと視覚刺激(ストロボ発光, ビデオテレビ)の3種類について個々の速度定数を求め、この解析モデルの評価を行ったので報告する。解析はsecond fitting時に残存するfirst injectionのCE (CEfst), CM (CMfst)を、second fitting時に組み込み、非線形最小二乗法にて計算させた。

### 388 <sup>15</sup>O標識酸素ガス短時間吸入による局所脳酸素代謝量と局所脳血流量の同時測定

飯田秀博 (秋田脳研放射科), C. G. Rhodes, A. I. Araujo, Y. Yamamoto, R. de Silva, A. Maseri, T. Jones (MRC Cyclotron Unit, Hammersmith Hospital, London)

刺激による局所脳機能測定法のひとつとして、<sup>15</sup>O標識酸素ガス(<sup>15</sup>O<sub>2</sub>)単独で局所脳酸素代謝量(CMRO<sub>2</sub>)と局所脳血流量(CBF)を同時に測定する方法を開発し、その精度を評価した。2つの付加測定、即ち<sup>15</sup>Oを用いた脳血流量、及び<sup>15</sup>O<sub>2</sub>吸入ダイナミックスキャンによるdistribution volume (Vd)の測定を必要とした。4例の正常指運動刺激測定にて、安静時刺激時それぞれの第一次運動野領域のCMRO<sub>2</sub>値1.67±0.18及び1.74±0.26 μM/min/ml, CBF値0.57±0.16及び0.64±0.14 ml/min/mlを得た。CMRO<sub>2</sub>は<sup>15</sup>O<sub>2</sub>ダイナミックデータと<sup>15</sup>O<sub>2</sub>ダイナミックデータの同時解析結果(1.68±0.32及び1.77±0.35)と、またCBFは<sup>15</sup>O<sub>2</sub>ダイナミック解析結果(0.52±0.11及び0.63±0.13)と一致した。CBF値はVd値に非常に依存するがCMRO<sub>2</sub>値はあまり依存しない。従ってCMRO<sub>2</sub>のみを求めるなら<sup>15</sup>O<sub>2</sub>吸入(<sup>15</sup>O標識水静注)スキャンは省略できた。